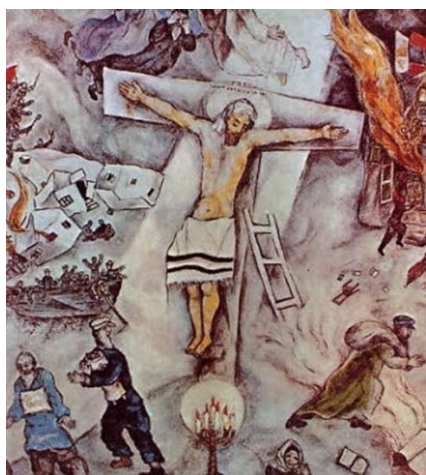


2018 年

アンドレア師のキリスト教美術史講座 受講ノート IV

in 船橋学習センター「ガリラヤ」

from 蔵由美の Facebook



アンドレア師のキリスト教美術史講座

In 船橋学習センター「ガリラヤ」

2018 年 1 月 17 日

今日は、船橋学習センター「ガリラヤ」でのアンドレア・レンボ師の「聖書における女性の姿と西洋美術史」を受講してきました。

1～3 月まで 4 回シリーズの第 1 回目は「エバ生きるものすべての母」がテーマでした。

聖書に出てくる女性とその物語を通して、女性の視点で「神を見る」ことにより、「神」の新しいイメージを知ろうというのが、このシリーズの趣旨だそうです。

旧約聖書の成り立ちにおいては、神の名が「エロイ」「ヤハウエ」と変わるように、いくつもの伝承が共存しているが、創世記で天地万物と人間を創造する「ヤハウエ」は、農家のように園を整え、陶芸家のように土をこね、医者のようにアダムからエバを生み、恥ずかしさを隠すための着物を作る人間らしい姿で書かれている。紀元前 9 世紀のソロモンの平和な時代の、人間はどこから生まれ、どこへ向っているのかという哲学的な問いと人々の生活を反映しているとのこと。

一方、「エロイ・エロイ・ラマ・サバクタニ」の神の呼び名の「エロイ」は、祭司のようにふるまう強い神のイメージだそうです。

創世記のエバは「生きるものすべての母」であり、名を付けするのは男の役割というユダヤの慣習からアダムが「エバ（命）」と名づける表現もみられるが、神の目から男女は平等。

神は、だました蛇に向って「お前と女、お前の子孫と女の子孫の間に、わたしは敵意を置く。彼はお前の頭を砕き、お前は彼のかかとを砕く。」という。ファティマの聖母像は足下に蛇を踏む姿で表されているのは、この説（創世記 1-15）由来するそうです。

美術史講座は、近代～現代のアートに見るエバ。16 世紀のルーベンス、18 世紀のウィリアム・ブレイク、19 世紀のシャガール、1917 年のグスタフ・クリムト、現代のフェルナンド・ボテロの作品が紹介されました。その時代のエバについての理解が反映されていて興味深かったです。



旧約聖書を構成する複数の伝承とその地域と時代の説明



ルーベンスの作品 美しい女性のエバ



ウィリアム・ブレイクの作品 (1795)



ウィリアムブレイクの「憐れみ」



シャガールの「アダムとエバ」



26 Adam and Eve (1912)



シャガールのモデルは、ミケランジェロの失楽園



クリムトの遺作、アダムよりエバの姿が印象的
ムーランルージュの女性がモデル？



現代のコロンビアの人気画家ボテロの作品
アダムがエバを支え、エバがアダムを慰めている。
アダムの天に挙げた手とエバが地を指す手、支え慰める手がXに交差し、キリストを表しているとのこと。



2018年2月21日

今日は、アンドレア・レンボ師の「聖書における女性の姿と西洋美術史-サラとハガル」を聴講、今回は、シャガールの生涯と、その作品のテーマである旧約聖書の解説でした。

マルク・シャガールは、ロシアの豊かなユダヤ人街で生まれ育ったハシド派の敬虔なユダヤ教徒。パリで活動し、幻想的で柔らかな色彩で愛の世界を描くが、第二次大戦時はアメリカに一時亡命、ユダヤ人の苦悩と救いを追及するモチーフも高く評価されています。

その作品の背景となるのは、旧約の人間の創造からユダヤ人の祖となるアブラハムとその家族の物語です。

創世記でサラはアブラハムの妻。飢饉でエジプト寄留の際に、アブラハムはサラの美しさゆえの身の危険を避けるため妹と偽ったため、ファラオはサラを娶るが王家に禍が降りかかるに及んで、二人はエジプトから送り出され、カナンの地を約束される。

高齢のアブラハムには子がなかったので、サラは女奴隷のハガルを側女として差出し、ハガルはイシュマエルを産むが、サラとハガルの間に確執を生じ、ハガルは逃亡する。不妊のサラはアブラハムに訪れた三人の客人（天使？）の予告通り、イサクを産む。アブラハムはイサクを犠牲に捧げる試練を受けるが、神はその信仰を顧みられて、イサクを救い、その子孫の繁栄が祝される。

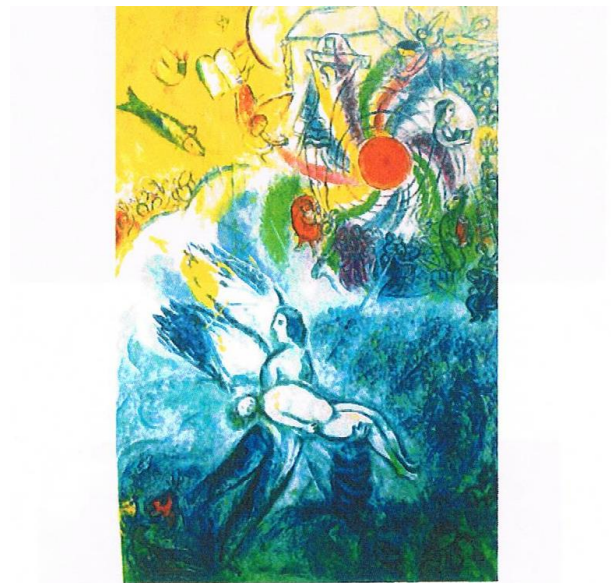
シャガールは、イエスの生涯や、イコンの世界にも共感し、そのモチーフを描いた作品は、普遍的な感動を与えてくれます。



笹沼さんの司会で講座が始まりました



愛に満ちあふれたエデンの園



創世記 1, 20 人間の創造



創世記 2, 4～ エデンの園

シャガールの描くアダムとイブと神の愛の世界



シャガールの「mamleにおける出現」

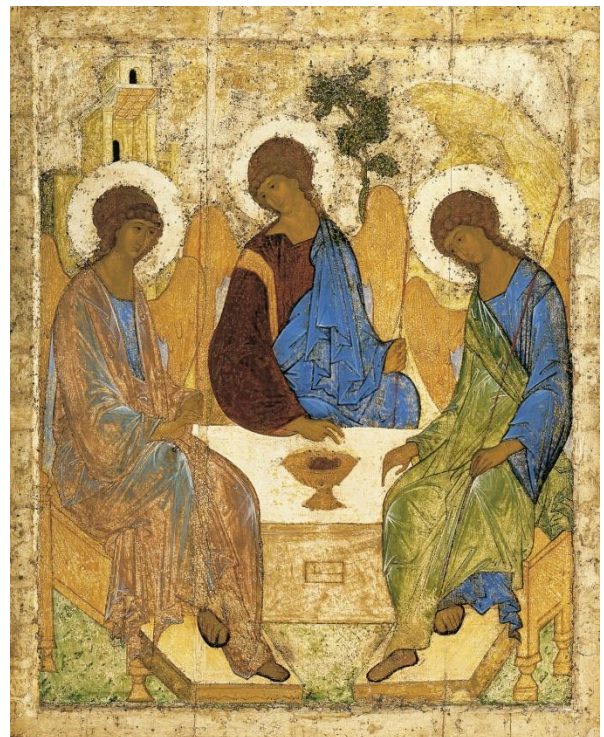
三人の客（天使？）をもてなすアブラハムとサラ。サラは、イサクを産むことを予告される。



「捧げ物にされるイサク」



mamleにおける出現



ルブリョフ（14～15 世紀）による「三位一体」のイコンが、シャガールの「mamleにおける出現」のモチーフ。



捧げ物にされるイサク

「捧げ物にされるイサク」

アブラハムの信仰を顧みて生贄にされることをとどめる天使。右上背景にイエスの受難が描かれる。





第二次大戦の戦禍とユダヤ人への迫害への救いは・・・

2018年3月7日

午前中、船橋学習センター「ガリラヤ」でのアンドレア・レンボ師の「聖書における女性の姿と西洋美術史」を受講してきました。

今回のテーマは「ルツ記」。ルツは、前回の「サラ」と共に旧約聖書で「王であるものの全ての母」とされる女性ですが、モアブ人という差別された異邦人で、寡婦。夫亡き後、難民としてモアブに寄留中に夫と息子に先立たれた姑のナオミが、故郷ベツレヘムに帰る際に共に移住して、有力者ボアツの子を授かり、その子はやがてダビデ王の祖となる話です。

時代はBC12-11世紀、士師の時代。ユダヤ教は、父ではなく母の信仰を継承することから、異邦人であるルツの子孫がユダヤの王になることは、異例のことでした。

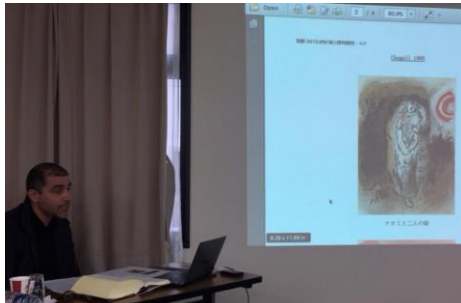
艱難辛苦の逆境を健気に生きたナオミとルツ。「神の計らいは、人間の行いによって成し遂げられる」というメッセージです。

キリスト教の初代教会は、ユダヤ教からの改宗信徒と異邦人信徒の共同体の時代、サラはユダヤ人信徒、ルツは異邦人信徒の母としてシンボライズされたようです。



ベツレヘムに住むナオミは、飢饉のため難民となってモアブに移住する。そこはユダヤ人から差別された異邦人の地であった。

ルツを描いた美術として、シャガールとミケランジェロの絵画が紹介されましたが、旧約聖書の女性像は、未知のことばかりで、とても興味深かったです。



ルツがボアツの足元で休む (夜)



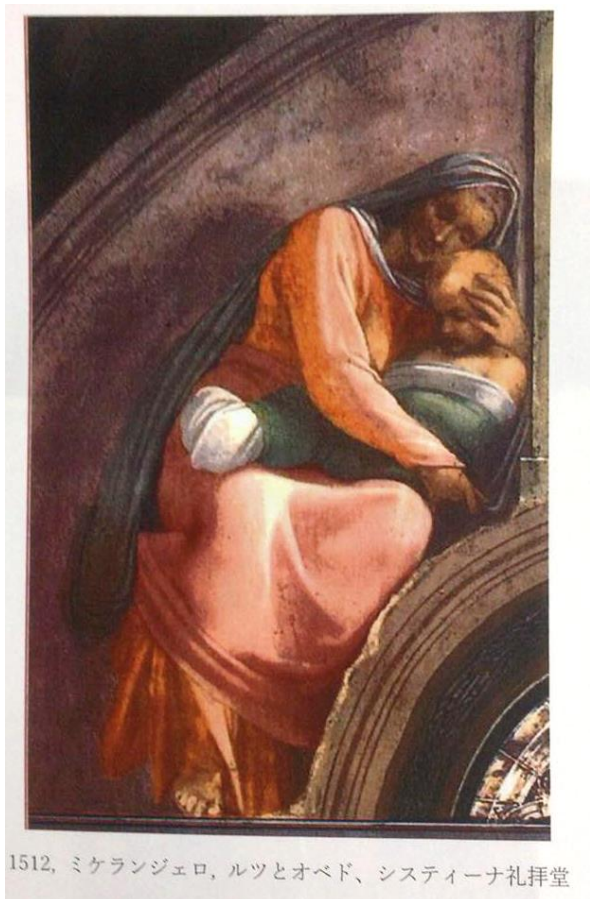
ルツと二人の娘



ルツがボアツの足元で休む (朝)



ルツが落ち穂を拾い



2018 年 7 月 11 日

今日は、2 月以来久しぶりに、船橋学習センターでの講座「聖書における女性の姿と西洋美術史」が開講、アンドレア・レンボ神父が超多忙な日程の中、講師をされました。

まずは、先週までの 1 か月のイタリア滞在中、ミラノ宣教会日本管区長として出られた世界の管区長会議の様子、そして 6 月 28 日にバチカンで前田万葉枢機卿を含む 14 人の新しい枢機卿を叙任する儀式に参列者として臨まれたこと、教皇様のショッキングな内容の説教、フィリピンのルイス・アントニオ・タグレ枢機卿との再会など、ホットな話題を話されました。ミラノ宣教会は、アフリカやアジアの極めて宣教が難しい国や地域でも活動されているほか、バチカン美術館ではキリスト教関連ではない世界の民族の芸術品や文化財も多数所蔵、その整理研究にあたっている会員もおられるとのこと。日本の 16 世紀の掛け軸など貴重な資料もあったそうです。

タグレ枢機卿の胸の十字架は貴金属ではなく、教皇から送られた木製。その素材は、シリアからの難民が地中海で遭難した舟の木材だそうです。



初代教会時代のサラ(左)とルツ(右)像



イタリアのミラノ宣教会の HP から



前田枢機卿の叙任式

各国大使の席で参列できたとのこと

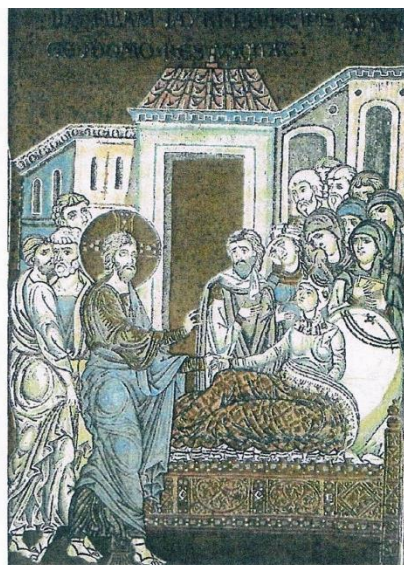


アンドレア神父様、東京大司教区の菊池大司教、フィリピンのタグレ枢機卿

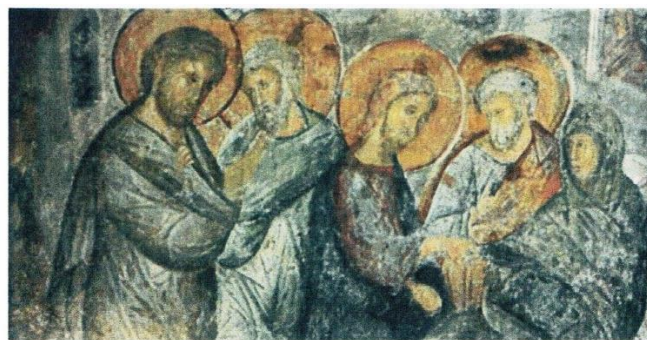
後半の恒例の聖書と美術史講座は、今回はマルコ福音書で、イエスがシモンペトロのしゅうとめ、出血症で 12 年悩み差別された女性などの病気を癒される奇跡とその意味についてでした。その続きと深い内容は、また来週の講座で。



ヤイロの娘をよみがえらせるイエス



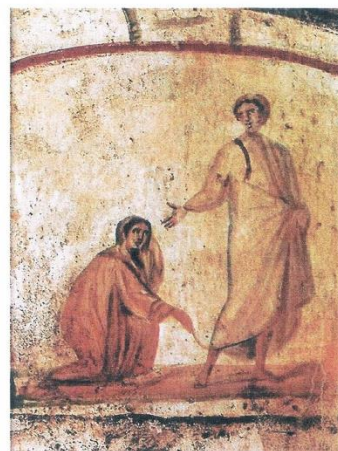
XII 世紀、モザイク、Monreale 大聖堂、Palermo, IT



IX 世紀 - Affresco, Mistra (Gr) ビザンチン教会

発熱したシモンペトロの姑を癒すと、彼女は、すぐにもてなすため働いた。

マルコ 5, 21-43



(III-IV 世紀, Roma, 聖 Marcellino 聖 Pietro Catacombe)

イエスの衣にふれるだけで癒された出血症の女

2018年7月18日

今日は、猛暑の中、船橋学習センターでのアンドレア・レンボ神父の講座「聖書における女性の姿と西洋美術史」を聴講に行きました。先週(7/11)の講座は、イタリアでの体験談が面白くて、本題はちょっとだけでしたが、今日はマルコの福音に登場するイエスに病気を癒された無名の女性たちについておさらいから始まり、そのもつ深い意味を解説されました。病いゆえに社会から排除された女が回復を願って、イエスの衣にふれたその思いは、宗教的な信仰というより、そのつらさを癒してほしいという人間的な動機であったのかもしれない。イエスは、無意識のうちに癒しを行い、自分の内から力が出て行ったことに気づく。イエスと出会って心身の回復を得たとのみ語るマルコの福音は、当時の人々にも、現代の日本の社会にも受け入れやすい単純さが特徴とのこと。

また、フェニキアの異邦人の女が娘の精神の回復を願い、「食卓の下の小犬もパン屑はいただきます。」と訴える小犬のたとえは、当初はイスラエル人だけを対象にしていた宣教活動も異邦人へと拡大していく過程を反映しており、活動の中でイエス自身も弟子たちもその信仰と教義が発展していったといえるとのことでした。

その他、聖書で有名なサロメについては、カラヴァッジョやティツィアーノ・ヴェネチエリオの作品「洗礼者ヨハネの殉教」をもとにした美術史解説がありました



イエスとその衣にふれる女性

ビザンチン様式のイコン以前の古代ローマのカタコンブの壁画。禁教期のイエスの姿は、ローマの議員の姿で表される。



異邦人フェニキアの女の嘆願を聴くイエス

1617年オランダのペーターラストマンの作品





「イエスとカナン人の女」Annibale Carracci 1595

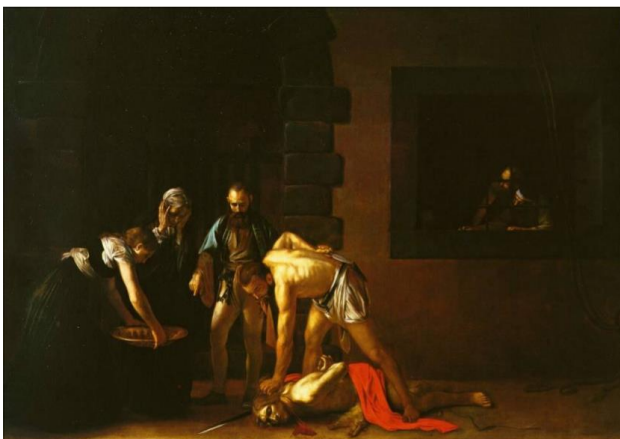


ティツィアーノ・ヴェチェッリオの「サロメ」1515



カラヴァッジョの「洗礼者ヨハネの殉教」

カラヴァッジョ自身が死刑判決を受けて逃亡中の作品で、
無実の自分をヨハネに見立てているとのこと。



グスタフ・クリムトの「サロメ」1901年



2018年7月25日

アンドレア師の講座「聖書における女性の姿と西洋美術史」を聴講にいきました。

今日のテーマは、マルコの福音に登場する名もない二人の女性でした。

一人は貧しいやもめで、さいせん箱にレプタ銅貨二枚（当時の労働者の一日の賃金の1/10）を入れる場面（12章41）。金持ち達の献金に対して、イエスは「皆はありあまる中から投げ入れたが、あの婦人はその乏しい中から、あらゆる持ち物、その生活費全部を入れた」と言われる。アンドレア師は、「惜しまなく持っているすべてを神に奉げる」彼女の姿から、イエス自らも自分の全てを奉げることの決意をあらたにされたとのこと。

もう一人は、高価な香油が入れてある石膏のつぼを割ってイエスに香油を注いだベタニアの女性。「香油を300デナリ（一年分の給料相当）以上に売って施しにできるのに」という人々に、「できる限りのことをした彼女の行為は、私の葬りの準備、そして福音の記念の語りとなる」とイエスは言う。（14章3）

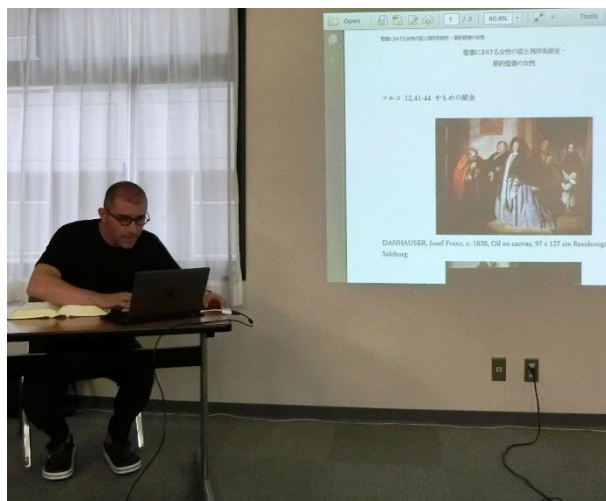
アンドレア師は、「イエス自身も無名の目立たない女性たちの行為に出会って成長していかれ、最後に自分の全てを奉げた」と述べられました。

美術史講座「やもめの献金」は、19世紀半ばのジョセフ・ダンハウザーとラファエレ・カスネディの作品。おごった金持ちの姿と対照的に描かれた右後ろの貧しい母子像が、映画の一シーンのよう。ラファエレ・カスネディの描く寡婦の姿は19世紀当時の女工などの貧しい労働者の身なりですが、聖母子像のような神々しさを感じさせます。

ベタニアでの香油の女性は、中世のイコンと17世紀のルーベンスの作品。中近世は聖書を庶民が読むことはない時代でしたので、「ベタニアの香油を注ぐ女」と、「罪深い女」（娼婦？）、そして「マグダラのマリア」が混同されることが多く、この3人は全く別の女性なのですが、ルーベンスの作品では肩をあらわにした「罪深い女」に近い描き方

のようです。

その他、マルコなど共観福音書とヨハネ福音書のもつイエスの最後の「遺言」の真意の相違など、今回も深く熱い講義でした。

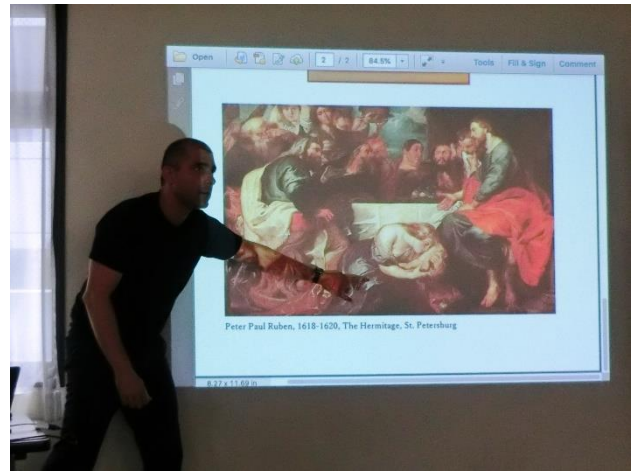


「やもめの献金」ジョセフ・ダンハウザー1838

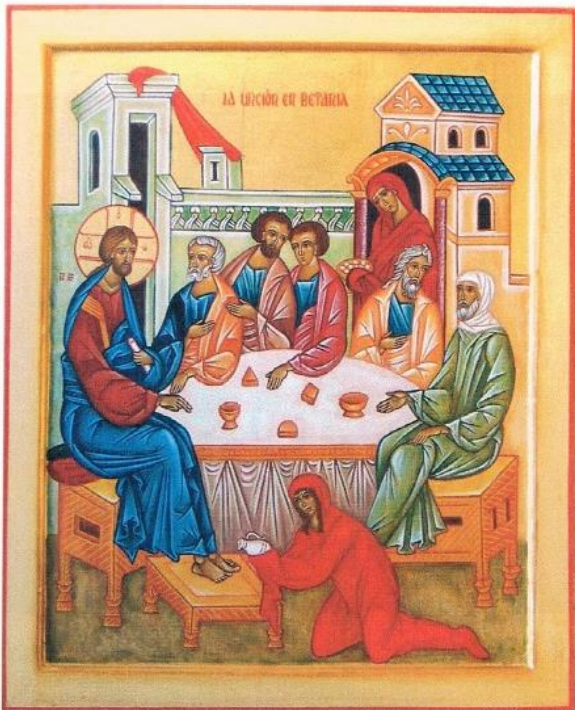




「やもめの献金」ラファエレ・カスネディ 1854



ピーテル・パウル・ルーベンス「シモン家のイエス」170



「ベタニアの香油を注ぐ女」中世のイコン

2018年9月12日

今日は、船橋学習センターガリラヤで始まったアンドレア・レンボ師の講座「カラヴァッジョの絵画と聖書」の第1回目を受講してきました。

カラヴァッジョの作品については、アンドレア師の講座で何回か紹介され、2016年春に開催された国立西洋美術館の「カラヴァッジョ展」や、その年のイタリア旅行ではローマの美術館や教会堂で実物を見る機会に恵まれましたので、とても興味深いテーマでした。

第1回目の今日は、カラヴァッジョ(1571 - 1610) = 本名「ミケランジェロ・メリージ」の生い立ちと、20歳代のローマ時代前期の作品について。ミラノの裕福な家に生まれ、当時のペスト禍から「カラヴァッジョ村」に移住して育ったことから、カラヴァッジョの通称で呼ばれているとのこと。

ミケランジェロやダヴィンチのルネッサンス絵画の影響を受けつつ、明暗と写実的な表現に若いころから類を見ない才能を発揮して、年若い仲間をモデルにした作品を生み出したが、ローマの裏社会の遊蕩も経験していたらしい。『トランプ詐欺師』(1594年頃)はトリックに引っかかる若者をめぐる心理描写と三角形の構図が卓抜した作品。

初めての宗教作品『懺悔するマグダラのマリア』(1594 - 95年頃)は、当時はマグダラのマリアを娼婦とする誤解が一般化していたので、その見解で描いているが、深い悔悛と救済の情が伝わってくる。そのスタイルは、顔を右に傾けているが、ミケランジェロのピエタの聖母の構図とのこと。

『イサクの犠牲』(1598年ごろ)は、天使(神)と羊に強い光が当たり、明暗がはっきり表されている。手元の羊は、イサクの代わりに捧げられる過越しの羊。人の罪が強調されると同時に、神による罪からの解放の確実性を示している。イサクはカラヴァッジョの自画像とのことでした。

唯一の例外の作品は『エジプトへの逃避途上の休息』(1597年頃)。ダヴィンチ風の背景にボッティチェリを思わせる牧歌的で優しさに満ちた作風に

は、カラヴァッジョの光と影、生活感のある写実性は見られません。

この後、波乱万丈の人生を反映したカラヴァッジョの宗教画の作風は、賛否両論の反響を呼びながら『エマオの晩餐』(1601)などの独自の境地を開いていきますが、それは次回の展開になるそうです。



カラヴァッジョの初期の作品

左上『果物の皮を剥く少年』(1592年ごろ)

左下『果物籠を持つ少年』(1593年 - 1594年)

右上『病めるバツカス』(1593年ごろ)

左下『女占い師』(1594年ごろ)



『トランプ詐欺師』のリアルな手つきを説明されるアンド
レア師



『イサクの犠牲』(1598 年ごろ)



『懺悔するマグダラのマリア』(1594 - 95 年頃)



『エジプトへの逃避途上の休息』(1597 年頃)

2018 年 10 月 10 日

今日は船橋学習センター「ガリラヤ」でのアンドレア・レンボ師の講座「カラヴァッジョの絵画と聖書」を聴講してきました。

今日のテーマは、2 枚の「エマオの晩餐」と、この場面のテーマ「ルカ 24 章」についてでした。

バロック絵画の形成に大きな影響を与えたカラヴァッジョ。その生涯の中でも、1600 年から 1606 年はローマで最も有名な画家として活躍し、有力者からの依頼も多く、また自己主張の強い作品を製作し、その是非をめぐっての話題も多かった時代ですが、1606 年殺人事件を犯してローマから逃亡の身となり、作風も一変します。

今日の講座も、その生涯の明暗を分けるふたつの 1601 年と 1606 年の作品の違いについてでした。

「ルカ 24 章 13～32」では、イエスの埋葬から三日目、二人の弟子がエマオへ向かいながら、これまでの出来事について論じ合っていたとき、イエスが近づき、旧約に書かれた預言からその出来事の意味を説き明かされたが、二人には、誰かも、またその話の意味もわからず、そのまま宿に泊まる。そして「一緒に食卓につかれたとき、パンを取り、祝福してさき、彼らに渡しておられるうちに、彼らの目が開けて、それがイエスであることがわかった。すると、み姿が見えなくなった。」

初代教会にとって、もう直接会うことのできない「イエスの不在」は大きな課題であり、そうであることから、このエマオへの道での復活したイエスとの再会は、信仰上重要な出来事で、ルカ伝のこの場面は、マルコも短く書いています。(マルコ 16 章 12～13)

イエス亡き後、その出来事を旧約聖書から読み解きながら語り合い、イエスの言葉を聴き、食卓でパンを裂き、そのとき主と再会するこの章は、まさにミサの形式であり、今に及んでいます。

カラヴァッジョの 1601 年の作品は、明るく、赤と白の衣をまとうイエスは若い姿で、観るものと一緒に食卓を共にする構図。食卓には、葡萄と

創世記を思い起こさせる林檎、そして生贄としての子羊が、カラヴァッジョの得意とする技法で描かれ、その影がイエスを表わす魚の形をしている。左はルカ伝に名のあるクレオパ、右は巡礼者の印をつけたヤコブ。巡礼は当時、贖罪の行為であったとのこと。

1606 年の作品は、作者の逃亡と贖罪の反映か、暗い闇が印象的。イエスも旅に疲れた巡礼者、宿の老夫婦はアダムとエバの晩年の姿のようで、食卓もパンとブドウ酒のみですが、かえって奥深く心に響く作品です。

その宿の老夫婦の姿が、「ロレートの聖母子」の絵の巡礼の夫婦と似ていることも驚きでした。



今日はカラヴァッジョ 1601 年と 1606 年の二枚の「エマオの晩餐」がテーマ



1601 年の「エマオの晩餐」 明るく若いイエス、両手広げた右手の弟子には巡礼者の貝殻の印、果物の影は魚。



カラヴァッジョ 「エマオの晩餐」 1601-02



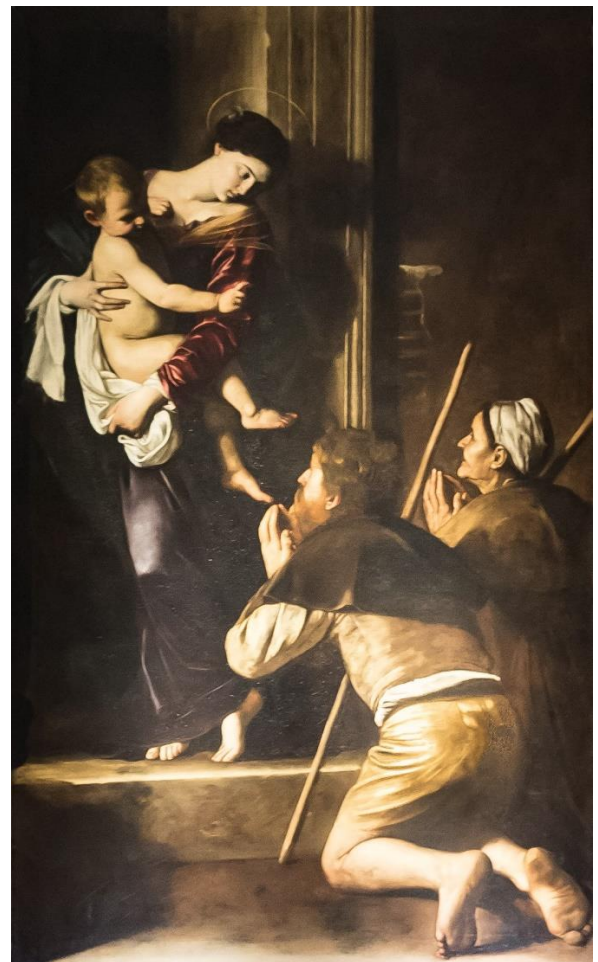
カラヴァッジョ「ロレートの聖母子」

聖母の姿は、当時考えられない職業の女。

ひざまずく巡礼者夫婦の姿は足の裏までリアル。



カラヴァッジョ 1606 年の「エマオの晩餐」





初代教会で魚はイエスを表わす。



司会の塩澤様も、お疲れ様でした。

2018 年 10 月 24 日

今日は、船橋学習センター「ガリラヤ」でのアンドレア・レンボ師の講座「カラヴァッジョの絵画と聖書」の3回目の講座を受講しました。

まずは、前回（10/10）の「エマオの晩餐」の2点の作品の復習で、カラヴァッジョのローマ時代全盛期 1601 年の作品と、罪を犯してローマを出奔した時期の 1606 年の作品の明らかな違いについては前回のおさらいをしました。

二つの絵には、イエスと二人の弟子のほか、第三者の宿の主人（1606 年では夫婦）が描かれています。今回の講座は、この宿の主人をどう見るのかという問いでした。

1601 年の作品の宿の主人は、イエスと同じ赤と白の服をまとっている。それはイエスとその復活の秘儀を知らない人でも、イエスの御業の救いに与っていることを意味する。現代は、第二バチカン公会議の『現代世界憲章』では「・・キリストはすべての人のために死んだのであり、・（中略）・したがってわれわれは神だけが知っている方法によって、聖霊が復活の秘儀にあずかる可能性をすべての人に提供すると信じなければならない。」と述べており、私たちの見えない形で神が働き、すべての人に救いの業をもたらされているとのことでした。

後半のテーマは、「聖マタイの召命」、「聖マタイの靈感」、「聖マタイの殉教」の三部作について。この三部作は、2016 年 6 月のイタリア巡礼旅行で、ローマのサン・ルイージ・デイ・フランチェージ教会で鑑賞した思い出の多い作品です。

左壁にあった「マタイの召命」は、右端に立つペトロとイエスとその時代の服装で描かれているのに対し、左のテーブルに座る「罪人と徴税人」5名は、カラヴァッジョの生きた時代の場末の居酒屋の客のよう。このうちだれが徴税人のマタイかは、諸説あるが、特定できない。5人それぞれの人生のあゆみがあり、全てが呼びかけられたマタイである。イエスが招いているのは、当時の「現代」

の人々であり、それは今も変わらない。

中央の「聖マタイの靈感」は、マタイが天使からインスピレーションを受けて福音を書く姿。「天国のことを学んだ学者は、新しいものと古いものとを、その倉から取り出す一家の主人のようなもの」（マタイ伝 13-53）という比喻のように、旧約を踏まえた新約の教義を展開する姿である。

右壁の「聖マタイの殉教」のマタイの服装は、当時のドメニコ会の修道服。イエズス会やフランシスコ会が活躍していた当時、カラヴァッジョはドメニコ会に共感していたのであろう。

カラヴァッジョの宗教画は、当時の「現代」。それも社会の底辺に生きた人々をリアルに描き、それには依頼者や奉納先の反発や葛藤もあったが、神学的には斬新で、真実を訴える姿勢は、現代に通じ、大胆であったとの強い印象をうけました。



イエスとその弟子たちとは無関係であった宿の主人（右）は、イエスと同じ色の服装に描かれ、すべての人への救いの業を表現しているとのこと。



村上さんのチャームिंगなすてきな司会で始まりました。





2018 年 11 月 14 日

今日は、船橋学習センター「ガリラヤ」でのアンドレア・レンボ師の講座「カラヴァッジョの絵画と聖書」の4回目の講座を受講しました。

今回のテーマは、「聖ペトロの磔刑」と「ダマスカスの途中での回心」（パウロの回心）。いずれもカラヴァッジョ全盛期の1601年の作で、今でも当時の姿のまま、サンタマリア・デル・ポポロ教会で見ることができるとのこと。

まずは、「ペトロとアンデレの召命」の絵。最近カラヴァッジョの真作とわかったイギリス王室所蔵の絵です。

右に立つイエスは、ラファエロ風的美青年で青・赤・白色の衣は聖・人間・復活を表わす。中央のアンドレと漁師で魚を持つペトロは、伝統的な老人の表現。マルコ伝1-14で『イエスはシモンとシモンの兄弟アンデレが湖で網を打っているのを御覧になり、「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」と言われ、二人はすぐに網を捨てて従った。』の場面です。



2016 年 6 月のイタリア巡礼の際、ローマのサン・ルイージ・デイ・フランチェージ教会で撮影のマタイ三部作「聖マタイの召命」、「聖マタイの靈感」、「聖マタイの殉教」



「聖ペトロの磔刑」については、ローマの史跡案内から。ペトロの墓のあるバチカンの聖ペトロ大聖堂は、ネロの競技場だったところで、初代キリスト教徒の殉教が行われた場所。ペトロが逆さ磔の刑で殉教した時の柱穴があったという伝承地は、ジャンニコロの丘で、ブラマンテのテンピエット（聖堂）がある。この聖堂はルネッサンス建築の中で最も調和のとれた設計で、以後のドーム建築の基本となった。

カラヴァッジョの絵は、釘付けられたペトロの十字架を逆さに立てようとする瞬間を写真のように表現していて、モデルにポーズされて描いたのだろう。刑を執行する3人の表現の苦しみもリアルに描いている。

ここで、マルコによる福音8-27～9-1でイエスがペトロと弟子にいう「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。」についての解説。「イエスの十字架



を背負うなんて無理。自分の十字架を背負うことのみで十分」というアンドレ師の心にしみる言葉でした。

「ダマスカスの途中での回心」の絵は、一作目の「パウロの回心」が依頼先から受け入れられなかったことから「ダマスカス」を付けて描かれた二作目の作品。

光を受けて目がくらみ落馬するパウロの姿は着地直前で、写真というより動画の一コマのよう。パウロがローマ市民として乗馬の特権を持つことから、馬と剣がそのアイテムで、また剣は、パウロの召命が全ての異邦人のためであり、全世界に神のみことばを述べ伝える騎士の象徴とのことです。



ローマ市内のマップで。「バチカンの聖ペトロ大聖堂は、ネロの競技場だった。ペトロの殉教地は赤マークのところ」



「ペトロとアンデレの召命」

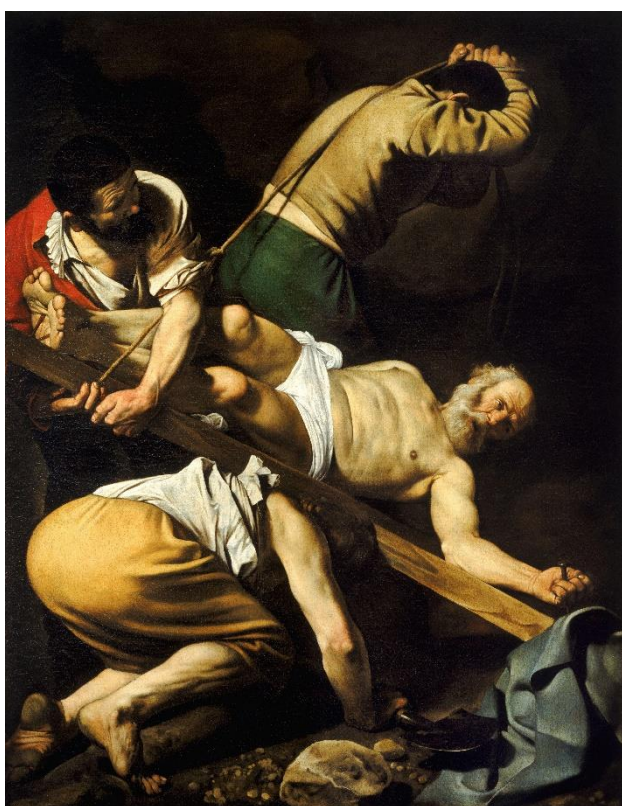


ブラマンテのテンピエット（聖堂）

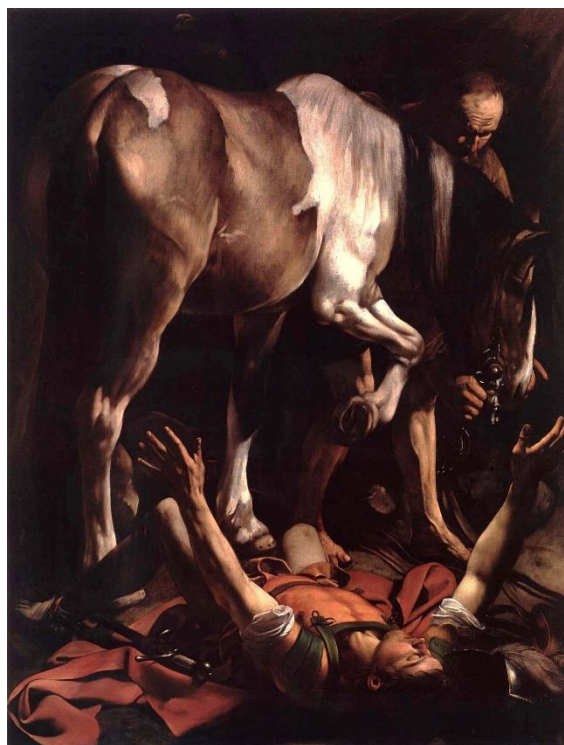




「聖ペトロの磔刑」



「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。」についての解説。「イエスの十字架を背負うなんて無理。自分の十字架を背負うことのみで十分」というアンドレ師の心にしみる言葉でした



「ダマスカスの途中での回心」

2018 年 11 月 28 日

今日は、船橋学習センター「ガリラヤ」でのアンドレア・レンボ師の「カラヴァッジョの絵画と聖書」の4回目（最終回）を受講してきました。

今日の講演は「聖アンナと聖母子」の作品（1605～6年）をテーマに、創世記の天地創造の物語からみる「人間」像、原罪とマリアの存在、そして、罪と救いの御業についての歴史上の教会の解釈を、再度批判的に問い直してみようという難しく濃い内容でした。

この作品のマリアは最も美人な聖母と評されている。そのモデルはラファエロもモデルにした当時有名な女性で、依頼者の意向でバチカンの聖ペトロ大聖堂の祭壇へ奉納されたものの、描かれたその誘惑的な身なりは物議を醸しだし、すぐに撤去されたとのこと。

創世記 03:14～15「主なる神は、蛇に向かって言われた。お前は・・・呪われるものとなった。・・・お前と女、お前の子孫と女の子孫の間にわたしは敵意を置く。彼はお前の頭を砕く」から、伝統的にマリアは罪の象徴の蛇を踏んで描かれが、カラヴァッジョの絵のマリアの足は蛇の頭を踏み、その上に幼児のイエスの足が重ねられています。

原罪を強調しすぎた古代のアウグスティヌスの神学に対し、創世記の語る「人間」は、神がその姿をかたどって創造された特別の存在で、「人間は良いもの」であり、また「人と人の間」に神はおられるとの、アンドレア神父のお話は心にしみるものでした。

「ロレートの聖母」に登場する巡礼する老夫婦は、アダムとエバであり、私たち自身。

また「キリストの捕縛」は、信頼する友ユダに裏切られる瞬間のイエスの苦悩を表現している感動作。

「キリストの埋葬」の構図は巧みで、埋葬を行うアリマタヤのヨセフは、カラヴァッジョの尊敬するミケランジェロの容貌で描かれている。

ヨセフの名は「神が守る」という意味、イエスの

誕生に立ち会ったのもヨセフ（大工でイエスの養父）、そしてその死に立ち会ったのもヨセフでした。



カラヴァッジョ「聖アンナと聖母子」のマリアについて
（美しすぎるマリアの姿が当時、問題に・・・）



マリアの足は蛇の頭を踏み、その上に幼児のイエスの足が重ねられています。



「聖アンナと聖母子」

2016 年 6 月 12 日、ボルゲーゼ美術館で撮影



「ロレートの聖母」 マリアは街で誘惑する女性の姿、
「キリストの捕縛」

巡礼の老夫婦は私たち自身であり、アダムとエバであるとのこと。



「キリストの捕縛」



「ロレートの聖母」

2016 年 6 月 12 日ローマのサンタゴスティーノ教会で撮影



「キリストの埋葬」

